

【シンポジウム第二部】

## 学芸員って何だろう



柴田敏隆氏 (元横須賀市博物館学芸員)

林 公義氏 (横須賀市自然・人文博物館館長)

浜口哲一氏 (平塚市博物館上席館長代理)

コーディネーター；

瀧端真理子 (追手門学院大学助教授)

第二部では開館50周年を迎えた横須賀市自然・人文博物館へのお祝いの意も込めて、館にゆかりの深い、柴田敏隆氏、林公義氏、浜口哲一氏に、それぞれの学芸員観を語っていただいた。事前の打ち合わせで、柴田氏から「お祝いの席だから」との示唆をいただき、第二部は終始なごやかに進められた。三人のパネラーの先生方はお互いに配慮されながらの発言であり、その一方、博物館学および全日本博物館学会に対しては、率直な叱咤激励が寄せられた。

第二部の設定に際して、コーディネーターの側からは、①学芸員の仕事とは何をするのか、今後どのような学芸員を育てていくべきか、②学芸員が館の外の世界とどのように関わっているのか、この二点を話していただくようお願いした。この二つの観点はシンポジウム第一部とも関連して、社会全体の中での博物館の地盤沈下とも呼ぶべき今日の状態に対して、博物館の側がどのような積極策に打って出るのか、という問題に密接に関連する。

公共的使命を担って存在する博物館が、社会情勢の変化の中で、他の公共的価値を担う活動・事業と、人的・財政的資源を分かち合わねばならない事態に、私たちは直面している。その中で待ちの姿勢のままでは、人の足は遠のくと思われ、それぞれの館が館の個性を探求し、館内での合意形成を図りつつ、館の外へ積極的に関わっていくことが大切であろう。私たち学会員には、館の内側に所属する者もあり、また館の外側に位置する者もある。

第二部のパネラーの先生方は、博物館内部での活躍はもちろんのこと、すぐれて館外世界との関係を大切にしてこられた方々であり、その実践・苦悩・展望を具体的に語っていただいたことは、大変刺激的であった。柴田氏からは家庭生活をも犠牲にしかねなかった学芸員の激務ぶりを、林氏からはポジションの変化に伴う仕事内容と思考の変化や、専門知識を武器にアマチュアダイバーたちと関わる楽しみを、浜口氏からは市民の意識の多様化に対応することの難

---

しさを現在進行形で語っていただいたことが、個人的には印象深かった。

さて、最も大きな課題として残ったのは、博物館学、あるいは学会のあり方に対して、パネラーの先生方から投げかけられた問題であろう。柴田氏からは、地球全体の将来を見据えることのできる未来志向型の学芸員の養成を、林氏からは、博物館学の授業担当者が本当に自身のミュージオロジーを持っているのか、学会としてこの問題をきちんと議論すべき、と求められた。また浜口氏からは、現場学芸員と博物館学の研究者とが刺激し合える関係が必要ではないか、現場でがんばる学芸員のよりどころとなる学会を、との要望がなされた。

これらの厳しい指摘は、筆者一人で答える問題ではなく、また一方的に、博物館の外に位置する者だけが責められるべき問題でもない、と個人的には考えている。しかし、現役学芸員やOBにも恵まれた本学会全体として真摯に向き合わねばならない問題であろう。「博物館研究」には多様な切り口が存在し、その多様な切り口による調査研究の質的量的充実が、筆者自身も含めた現在の学会に求められる、最初の一步だと個人的には考えている。(瀧端 真理子)

瀧端 それでは、司会を担当致します追手門学院大学の瀧端真理子です。よろしくお願ひ致します。また、改めまして横須賀市自然・人文博物館の関係者の皆様、今日大勢お集まりのことと思ひますが、博物館の利用者やファンの皆様、開館50周年、おめでとうございます。

第二部では、「学芸員って何だろう」をテーマに、パネラーの先生方からご報告をいただきたいと思ひます。幅広い活動が続けておられる3人の先生方のご紹介は、先ほど林館長が自然教育園の話を始めたら2泊3日でも終わらないと言われたのと同じように、ご紹介を始めると、本当に2泊3日どころでは終わらないので、私の方からは簡単にご紹介させていただきます。それで至らなかったところは各先生方のご報告の中でまた補っていただければと思ひますので、よろしくお願ひ致します。

まず、柴田敏隆先生です。(拍手)

横須賀市博物館の開館当初からの学芸員として、1974年までの20年間にわたり羽根田館長とともに博物館の活動を多方面から支えてこられました。柴田先生は学芸員としてのお仕事を通じて、それからそれと並行して結成された三浦半島自然保護の会の活動を通じて、横におられます林館長、それから平塚市博物館の浜口先生をはじめ、多くの自然を愛する方々を育ててこられました。

柴田先生の博物館学への貢献も多岐にわたるのですが、収集にまつわる倫理、それから昨日、エコミュージアムの見学会もあったのですが、現地保存の思想など、その内容の先見性というのは現在も高く評価されるものだと思っております。自然保護の各分野でのご活躍は、改めて私が申し上げるまでもなく、誰も真似のできない幅広いご活躍と思っております。

続きまして、林公義先生です。(拍手)

---

今日のご講演でいろいろご紹介いただいたのですが、林先生はこの横須賀の地にお生まれになり、カニ小僧とご本人はおっしゃっていらっしゃるかもしれませんが、海の生き物に幼い時から親しんでこられて、博物館デビューを、今日映像で見せていただきましたが、まさに小学校4年生の時から博物館に出入りしておられました。

その後、魚類の研究に進まれて、今日のご紹介でもありましたけれども、高校3年生の時には既に館の연구원として活躍しておられました。1969年から館に奉職なさり、そして2003年から館長を務めておられます。ご専門はハゼ科魚類の分類や生態なのですが、学問としてさまざまな追究をなさり、そして資料を集められる。その一方でダイビングの指導を市民の方に行われたり、あるいはご特技の趣味の領域かもしれませんが、仕事にも役立つ写真撮影など、幅広い分野で活動しておられますし、館長先生になられてからはまさに第一部のテーマであった博物館の管理運営にもいろいろご尽力なさっておられます。

最後に、平塚市博物館の浜口哲一先生をご紹介いたします。(拍手)

浜口先生も昆虫少年でおられたそうで、中学校時代にこの館を訪れて、柴田先生に出会われて以後、博物館、それから自然観察、そして自然保護の分野で大変献身的な活動をなさってこられて、それは私よりもここにおられる皆さんのほうがよくご存じのことと思います。

浜口先生は、学芸員としては市民を巻き込んだ生き物地図づくり、あるいは漂着物を拾う会の活動などで、市民参加型の活動を長く繰り広げてこられるとともに、また館のお仕事を離れて一市民として日本野鳥の会神奈川支部をずっとサポートしてこられるなど、私たちから見るとどうやって体がもっているんだろう、いつ寝ておられるんだろうというような超人的な生活をなさっておられます。

第一部で半田先生がまさにスーパー学芸員、あるいはカリスマ学芸員とか雑芸員ということを言われたと思いますが、本当にどうすればこんなに働けるんだろうというぐらい、生き生きとした活動をなさっておられます。

今日のシンポジウムでは3人の先生方に私のほうから二つお願いをしております。お話しただく内容ですが、一つは各先生方のこれまでのご活躍を踏まえて、今後どのような学芸員を育てていったらよいのか。これは皆様へのご案内のチラシにありますように、学芸員の職能とは何かという、この問いを発展させたもので、例えば先ほどの第一部のシンポジウムでは井上先生から、博物館が総体として魅力がなくなってきた、その余波をこうむって、頑張ってきた自分たちとしては恐らく迷惑だと思っていられるのだと思うのですが、博物館に魅力がなくなっているという問題があると思います。あるいは、あれもこれもと欲張るのではなくて、どういう館の個性をつくっていくのか、その問題にもつながっていくかと思えます。

それからもう一点は、学芸員が館の外の世界とどういうふうにかかわっていくのか。この点についてお話ししていただきたいとお願いしております。これは3人の先生方が得意とされて

---

いる自然保護の分野でいいますと、例えば行政の他の部署との関係だとか、あるいは地域で活動しておられる市民の方々、さまざまな団体、あるいは運動、活動とどうつながっていくのかという問題でもあるでしょう。

それから、第一部で松永先生からご指摘がありましたように、今、博物館に来ている人だけではなくて、博物館を使っていない人たちにどうアプローチするのか、この点も館と、それから館の学芸員と外の世界とのつながりという問題だと思うのです。

それから、地域の人々が館にさまざまな要望・期待を寄せられます。その要望に対してどうこたえていくのか、あるいは時には館員がほんのわずかしかないのに、あれもやってほしい、これもやってほしいという、さまざまな願い・期待を寄せられる中で、あるいはこれはうちの館がすることではないということまで要望されるようなこともあるかと思うのですが、そういうものに対してどう対応していくのかということも含めて、お話しただけたらと思います。

私の方からお願いしたのは以上の二点ですが、この機会ですので、3人の先生方にはほかにもぜひ話したいという点がありましたら、つけ加えていただけたらと思います。

特に浜口先生からは、利用者が最近多様化している、利用者が博物館に求めるニーズも多様化している、そのような観点からもお話しただけということですので、楽しみにしております。

短い時間ですけれども、お一人約20分間ということで、柴田先生から順にお話を伺いたいと思います。それでは、どうぞよろしく願いいたします。

**柴田** 座ったままで失礼させていただきます。ご紹介いただきました柴田敏隆でございます。

まず、こんな光栄ある席にお招きいただき、発言の機会をお与えくださいました全日本博物館学会長の鷹野先生、それから横須賀市自然・人文博物館長の林先生に篤く御礼を申し上げます。

この博物館の最初の建物は海軍の工作学校だったのです。1953年というのは、ペリーが来航してから100周年になる。何か記念事業をやりたい。1954年は神奈川で国体がありまして、横須賀では卓球の会場を引き受けなければならない。それで、卓球の会場は海軍の工作学校の古い兵舎を使えばよろしい。でも、このかまぼこ形の何かみっともない建物は、これではペリーの記念事業には向かないだろうと画策していた時に、当時の助役が「こんなやつをつくれ」と、公衆便所のお化けのようなデッサンを描いた。それを市の建築部の職員が一生懸命格好つけたのがこの博物館ですね。そこに私は初代の学芸員として奉職を致しました。

館長、羽根田先生は発光生物の世界的な権威です。太平洋戦争の最中にシンガポールにラッフルズミュージアムという有名なイギリスの植民地博物館がありまして、それを日本が占領して——シンガポールのことを昭南と言ったのは、昭和で南進したというような意味で、昭南博物館と。うんうんとうなずいている方は、皆さん万延元年のお生まれですね(笑)。最近の方は何だ、それはって思うでしょう。



その昭南博物館の管理を委託されました。その時、羽根田先生は博物館のイギリス系の学芸員を全部解放して、本当は敵国の人ですから収容しなければいけないのに解放して、自由に博物館の業務を振興させた。と同時に、その人たちからイギリス型の博物館の運営や管理についていろいろ勉強した。羽根田先生はよくおっしゃっていたのですが、私の英語はキングズイングリッシュだよって。横須賀の英語はアメリカンイングリッシュでとてもひどいスラングなのですが、羽根田先生のはキングズイングリッシュだと。私ども伺ったら、あれはジャパニーズイングリッシュですね。すごくわかりやすい英語で。

それで、羽根田先生と私と、公衆便所型の、と言うとあれですが、ここで11年奉職していたんです。その時に林館長さんが小学校4年生で半ズボンをはいた色の白い目玉のくりくりとした少年でせっせと通ってこられた。浜口さんは中学生だったのですが、博物館を訪ねてきて、「この昆虫の標本のラベル間違っているよ」と私どもに指摘なさったんですね。申し訳ないと言っておきながら、すぐ直さなかったんです。その次に浜口先生がいらしたときに、まだ直っていないなというような顔をしていたんですが、実は部屋の中に標本箱を積み上げて、申しわけないけれどもこれ見てくれないと言ったようなことが、浜口さんとしては大変心の琴線に触れたらしいんですね。それで2人ともとうとう学芸員になってしまった。

先ほどのお話の最後に私にお話が飛びまして、渋谷で半田さんが私に会ったら、「日本の学芸員は雑芸員だ」って柴田はそう言ったと。ええっ、そんなこと言ったかなと思いました。でも、当時からそう思っておりました。

私は、日本の博物館の学芸員というのは、昭和27年に制定された博物館法に基づく学芸員という新しい概念規定であって、欧米の非常に巨大な組織の中でプロフェッショナルな研究を中心にやってきたキュレーターという学芸員とはニュアンスが違うのではないかと考えています。

私は、ミュージアム、博物館というのはミューズの神の殿堂というニュアンスがあるんだということで、古代ギリシャの時からそういうものができてきた。これは王様と、その王様におべんちゃらを使う宗教家が中核になって、庶民に自分たちの権勢を誇示するためにこしらえた博物館だ。そんなに悪口を言うてしまうといけませんけれども。

それから中世の、例えば大英博物館で代表されるような海賊博物館、武力で収奪してきた博物館。アメリカンミュージアムで代表されるのは、経済力で収奪してきた略奪博物館だと。戦後に日本の大学が海外に盛んに研究に出かけました。探検とか調査とか。その時に手に入れた資料をみんな持ってきてしまった。これは私は文化収奪だと。どうも博物館というのはそういう犯罪的な要素が影にちらりちらりとあるということ、どのぐらいの学芸員が自覚しているらっしゃるか。したがって、私は欧米型のキュレーターをそのまま日本に導入して学芸員としていいのかなという疑念は絶えずありました。

今度、瀧端先生が、私にとっては青天の霹靂なんですけれども、羽根田弥太と柴田敏隆の場

合というようなことで、初代館長の羽根田先生の基本的な姿勢と私の姿勢を対照的に取り扱って、瀧端先生はどちらがいいとも悪いともおっしゃらないんですが、片方はアカデミック、片方は非常にソーシャルな地域社会への働きかけで、これが例えば日本における近代博物館の活動の中で一つのエポックであると評価してくださった（\*瀧端真理子著「横須賀市自然・人文博物館の研究と教育（1）-羽根田弥太と柴田敏隆の時代-」全日本博物館学会発行『博物館学雑誌』第29巻第2号を参照のこと）。

確かに、羽根田先生と私とは気性から何から全然違います。寒がりとだらしなさは非常によく似ていたのですが、あとは全く対照的でした。

その対照的な羽根田先生と張り合ってたって、向こうのほうが大先生なんですから、話にならないのですけれども、私は羽根田先生から私の持っていない長所というのをいろいろ学び取って、羽根田先生は羽根田先生で、柴田のやつ、あれはなかなか役に立つ、あいつがいるから私は安心して海外に研究に出られるんだというようなことをおっしゃっていたというのを、先生がお亡くなりになってから奥様から伺ったんです。そうか、羽根田先生、そんなに私に対して信頼を寄せていらしたのかとびっくりしたのですが。しかし師弟の関係であり、上司と部下の関係でありながら、性格的に違う、業務の姿勢も違う。それが割合にほどよくバランスがとれた状態で11年間推移してきた。そして、12年目に博物館の移転の話ができたときに、これではいかんよというようなことで、地学の学芸員が入って、やがて林さんが入ってというようなことで、続々と学芸員が入ってきたのです。

そんないきさつの中で、私は雑芸員にならざるを得なかった。羽根田先生は発光生物専門の先生ですから、発光のことだったら世界中どこへでもすっ飛んでいってしまう。あのときに交通公社で57カ国のビザをとった、こんなお客さん初めてだと言うんですけれども、アメリカのサイエンスファンデーションという研究基金が出たものですから、先生はお出かけになってしまった。しかも博物館建てかえの非常に重要なときに館長が1年間留守してしまって、さすがに私は羽根田先生にかみついたんです。「先生、館長として不謹慎ではないですか」と。羽根田先生は苦渋に満ちたお顔をしていたのですが、おまえの言うのももっともだけれども、そうかといってこれをやめられるかと言って出て行ってしまった。そこが羽根田先生の羽根田先生らしい、すばらしいキャラクターですね。

そんなこともあったものですから、私は雑芸員たらざるを得ないと思いながら、むしろ私のあるべき姿というのはそこにあるのではないかなと考えました。博物館がこちらへ移転しても、羽根田先生を補佐しながら、私としては学問的な研究より地域社会への働きかけの方が、私の人生にとって意義が深いのではないかと思っている。それだけに、私は仕事に対して非常に愛着と興味というか、おもしろみを覚えて一生懸命やりました。

そこに書きましたけれども、「我ら学芸員～楽しくて、生き甲斐のある素敵な職能～」と、

---

「3日やったらやめられない博物館雑芸員!？」と書いてあるんです。これはわざと雑芸員と書いたんです。何もかもこなさなければ、日本の小さな零細な博物館の学芸員はキュレーターとっておさまってられない。そういうことをしていろいろ責められたり失脚したりする人たちが現にいるものですから、やはりいろいろなことをやっていかなければいかんだろうと思うのですが、この雑芸員というのが日本の博物館が欧米型の巨大な博物館に発展していくための過渡的なものなのか、いやもう欧米の博物館と一線を画して、日本型のというか、むしろアジア型というか、もっと気候風土的に言えば、生態文化複合的に言えば、「モンスーン地帯の新しい博物館」と私はネーミングをしたいのですが、ヨーロッパの牧畜を中心とした文化の中で生まれてきた博物館というのと、ちょっとニュアンスの違うそういう博物館の学芸員というのがあっていいのではないかと。

私が雑芸員というのは自嘲的に言うのではなくて、むしろ新しい思いを込めて雑芸員と言う。非常に楽しくておもしろいのですが、猛烈な欠陥がある。それは土日がなかったんです。それで私、20年で博物館を辞めたのは、実はそのバックに家庭生活がめっちゃめっちゃだったのではないのか。長男がおかしくなってしまったんです。今で言えば多動症候群と言うのでしょうか。お医者さんに呼ばれて、お父さんが30分でもいいから長男のために時間をとって、接触の時間を増やさないと言われて、これは大変な衝撃でした。辞めるということを思い立ったのは、実はその頃にその芽生えがありました。

これは私たちの仲間でそういう有名な話があったのですが、ふだん姿を見せないお父さんが、ある日1日休みがとれたので子供と一緒に過ごして、夜、子供が寝るときに「パパまた来てね」って。

それからもう一つ、今はそういうことはないと思うのですが、当時、若い新婚夫婦に、おたくの旦那さんどこへお勤めなんですかと若い奥さんに尋ねられたら、その人は、「主人は博物館の学芸員ですの」って答えたら、「まあお若いのにお気の毒な」と。その頃の日本人の博物館観というのは、そういう役に立たない物珍しい珍奇なものがぶら下がっているのが博物館で、それに携わる学芸員も珍しい存在だというような。これはちょっと歴史的な思い出です。

私はそういう形で、学芸員というのはむしろ日本の場合には新しいタイプの雑芸員という見方で物を考えてもいいのではないかな。そのことを鋭く指摘したのは、法政大学の若い学徒で伊藤さんという方だったのですが、伊藤さんは惜しまらくもがんで早く亡くなられた。亡くなられる前に非常に示唆的な論文を書いて亡くなられました。それを瀧端先生がご覧になって、伊藤さんが横須賀の柴田というのが独特の考え方をして、新しい博物館活動を展開しているよというようなことで、私のところに着目をなさったらしいんですね。これは瀧端先生の論文をご覧になると、そういう経緯が書いてあります。

そういうようなことを言っている限り、自分で博物館の学芸員に求められる資質というもの

---

を、プリントに書いてあるように、まずは Toughness (タフネス) であること。学芸員は頑健でないと務まりません。何もかもやらなければならぬ。

私は嵐の海で潜って資料の採集をしたことがあります。それから、トラックの運転も致しました。それから、漁師から船をチャーターして、沖で特別な魚ばかり100匹釣った。全然市場価値のない魚なんです、漁師が、「おまえ何でそんな外道ばかり釣るんだ」と言うから、「これ100匹釣るのが僕の使命なんだ」って、「僕はこれを釣れなかったら帰れないんだ」って。そういうようなことをやっていたものですから、「おまえの専門は何だ」とよく言われまして、1時間僕の話聞いて専門を当てたらコーラでも何でもおごってあげますよとって笑うんですが、まさに雑芸の権化なんです。

それだけに、学芸員に求められる資質として、まず頑健であること。それから、博物館の学芸員として当然の使命なのですが、収集の Professional でなければいけない。自然保護のためにやたらに自然物をとって持ち帰って殺したり、押し葉をこしらえたり、あるいは飼育して終身懲役にするようなあり方はいかんよと、博物館の考え方に取り込んだのは、先ほど林先生のパワーポイントに出てきた自然観察会で、採集会ではない。

ですけれども、それと学芸員が職務として資料を収集して博物館に保存するということは別問題、切り離して考えるべきであるというふうに私は考えまして、横須賀の博物館は伝統的に今でも自然観察会ってびしっとやっております。そして、学芸員は膨大な資料をここに収蔵している。これは学芸員としてきちんとけじめをつけておく大事なことはないかなと思います。今のような情報が錯綜する世界では、情報処理の Expert でなければいかならう。

それから Kindness、親切でなければいけない。学芸員が尊大な態度でそっくり返ってはいけないうらう。学校の先生は馬方型と僕は言っているのですが、馬の先頭に立って馬を引っ張っていくんですけれども、学芸員は牛追い型。後からうしうして牛を追うんです。牛というのは引っ張ったら動かないんですね。後ろから声かけていって、道を誤ったらちょっと軽くむちを当てて修正する。学芸員というのは牛追い型で、馬方型ではいけない。

SL機関車が学校の先生です。それから、今の電車はどこにモーターがあるかわからないですけれども、どこかにモーターのついた車両があって、運転手がボタンを押すと一斉にぱっと車両が走りだす。これは博物館の学芸員型ですね。優しくて親切丁寧で、わかりやすい話ができて、人々に奉仕をする。それから、Human relations を非常に大事にしなければいかな。どこにどういう人材がいて、どういう機能を果たしてくれるかって、頭の中に全部しまっていて、即時に頼む、頼んだら向こうが喜んで受けてくださるというような、そういう Human relations でありたい。

それから旺盛なやじ馬根性。僕は鳥が専門だからカエルのことはわかりませんか植物はわかりませんかなんて、ここの場合はそんなことを言っていられないんです。11年間、我々の税金

---

で学芸員として給料もらっているのに、わかりませんとは何事だというようなことを、かなりあからさまに言われたことがあります。それで一生懸命勉強してお答えするようになって、雑芸員たらざるを得ないですね。

そういうようなことで、Interdisciplinary って、学際領域を幅広くこなせるということは、日本の学芸員は一種の必然でもあるし宿命でもあるのではないかなと思います。

それだけに、学芸員に求められる能力としては Facilitation という考え方が最近はやってきて、何だこれとは言ったのですが、要するに「地の塩」に徹して下から盛り上げて、人々の活動を活発化させるというのは、Facilitator の役割。それに対して Coordinator というのは、監督とかそういうニュアンスもあるのですが、むしろここでは整合だとか調整だとかって、あまり上のほうから偉そうな顔して指示するタイプではない、そういう Coordination というのができる必要があると思います。

それから、Director もそうですね。これは演出とか指揮とかというのができなければいけない。博物館の学芸員の一番大事な使命というのは、実物でもって歴史をつづることです。実物で歴史をつづれば、歴史の流れというのがありますので、その流れがどういう未来志向をするかというのがわからなければ学芸員ではないと思うのです。したがって、今、私、日本の学芸員で一番大事なことは、近未来な、あるいはかなり先の未来がどうなるかということを目測して、それに対してどう対応したらいいだろうかと言えることです。

今、病気はどんどん治ってしまう。戦争はやらない。そして貧困は克服して行って、世界の人口は64億を超えています。私が生まれたときに20億（1930年）だったんです。このままで推移して100億になるのは、今世紀の末ごろは確実だろう。そうしたら、資源、エネルギーが足りなくなって、大崩壊が起こる。それでいいのか。64億を30億ぐらいに減らさなければバランスがとれない。だけれども、わずか50年かそこらで30億に減らすとすれば、核戦争以外にないんです。あなたたちはそれでもいいのかと。そういうことを問いかけられるようなのが学芸員の使命ではないかなと思います。

したがって、これからの博物館は、自然史系の博物館だったらず附属の自然園を持って、その土地に Endemic な自然、土地固有の自然の生態系を保全したり復元したり、あるいは場合によっては埋立地に新しくつくり出すというような試みをしよう。人文系の博物館だったら、歴史的風土の現地保全というのがすごく大事。今はやりの Ecomuseum であるのだったら、そのエリアの生態文化複合という考え方。梅棹さんの文明の生態史観ってありましたね。秋田学（\*秋田県立博物館設立の基本構想委員会で、委員の我々が提示した概念。以降「〇〇学」と、その地域を冠した「学」が流行った。）の時にこれを提示したんです。そういうのが新しい形で、モンスーン地帯にはモンスーン地帯独特の生態文化複合というのがある。それを全然風土の違う西洋型の文明を取り込んで、盲従していったいいのかというようなことを、Ecomuseum で

---

具体的に考えられると思います。

すみません、長くなってしまって。

瀧端 ありがとうございます。柴田先生からは、対市民、利用者の皆さんに対しては牛追い型でなければいけないということをご提案いただきましたし、それから専門家、あるいはハイレベル・アマチュアの方たちも含めて、Human relations というのを大事にして、利用者にまたそれを還元していく、そういうことが大事だというご提案をいただきました。それから、博物館の外の世界というのは、私の想像を超えて、地球環境全体のお話までしていただきました。

それでは、続きまして林先生にお願いしたいと思います。

林 今、司会の瀧端さんの方から大変過分な紹介をいただきましたけれども、私にも恩師がたくさんいますが、実は隣にそのたくさんいる恩師のお一人柴田先生がいらっしゃるの、ここで私が偉そうに学芸員とは何かというのを話すのが実に話しにくくてしょうがない。あまり落ちつきのない性格ではないのですが、3日前ぐらいからなかなか落ちつかなかったということもありまして、うまく話がまとまるかどうかわかりませんが、話を聞いていただければと思います。

実は、私が学芸員として、今日の博物館の個性をどう構築するか、地域との連携をどうするか、学芸員の機能的職能は何かということですが、これ実は三つともばらばらにお話しするというような状況より、この三つはかなり連携している、リンクしている話ではないかと思います。

私は、今年でちょうど35年間、横須賀市の博物館で、最初の1年は学芸員補ですから、学芸員としては34年ここに勤めていることになるわけなんです、当初、学芸員だったときに、学芸員とは何であるべきかと、そんな偉そうなことは考えたことはありませんでしたけれども、学芸員はこういうことをやったほうがいいのかと思っ、特に学芸員である周りの人たちのやっていること、なすこと、すべて見よう見まねで取り入れていくという、そういうことで精いっぱいだったと思います。

その後で少しずつ何か自分でも時間が持てるようになって、この博物館の中で自分ができることは何だろうか、今置かれている環境でできるものは何だろうかということをいろいろ考えて行って……。確かに先ほど柴田先生が紹介されたように、学芸員は本当に多種多様で、時間が幾らあっても足りないという状況なので、その中で自分のことを振り返って考える時間というのがなかなかとれない。中にはそういうのを全然気にしないで、どんどん身勝手なことをやっている方もいますが、通常であればほとんど自分のことをなかなか振り返れない。要するに時間の流れに追われていってしまうということが多いかと思います。

私が最初、学芸員っていいなと思ったのは——実は学校の先生もいいなと思っていたんですね。それからもう一つは、やはり学芸員って格好いいなと思っていました。それは小さいとき

から。

何が格好いいかという、今はあまりそういう感じが持てなくなりました。自分も多分学芸員になってしまったからなのでしょうが、学芸員さんが動いている姿、またはしゃべっている姿というのを見ますと、一種の心地よさというのがあるんですね。それは何かというと、何を聞いても割とよくすぐ質問に答えてくれる。先ほど学芸員はそうでなければいけないというお話がありましたが、それがいずれにしても格好いい。今の言葉で言うとナウい。

それから、心地よさがあるものですから、あんな人になってみたいという目標が出てくるんですね。ノーベル賞を取られました小柴昌俊先生がこの前横須賀市の教育研究所の招きで講演なさった話を聞いた時に、「好きということに別に定義はないんだ」ということなんですね。つまり、人を好きになるのに定義なんてない。好きだから好きなんだ。あの人になりたい、あの人のやっていることを何でもまねしたいというのに、別に定義はない、ルールはない。要するに自分のものとして取り入れてしまえばいいんだというようなこと。

私の理想は、横須賀市の博物館にいる学芸員さんを見ていると、ああいう人になりたいというのが一つの理想で、それに向かって何か進んできてしまったような感じもあります。ですから当時、学芸員になりたての頃は、できるだけそういう目標に近くなるようにということで自分でもやっていたと思いますし、学芸員とはそうあるべきだろうと思っていました。しかしこちらの自然館のほうに移ってから、それなりの勤務年数と、それから仕事上のポジションというのでしょうか、そういう職階級の立場になると、その時点で自分がやらなければいけない仕事もありますし、かといって自分の専門職もなかなか捨てがたいところもあるというような状況になると、結構ジレンマが出てきて、自分としてはどちらの仕事を選ぶべきかということで自問自答する時期も確かにありました。

それからまたさらにそれを乗り越えて現在の状況になりますと、管理職という立場で学芸員のことを考えるというのはなかなか難しいんですね。確かに私たちが現役の学芸員でバリバリやっていた時は、私どもの上司である管理職の方に、これだけ説得して、これだけ話をして、これだけやりたい仕事があると言っているのに、何で予算がとれないのだろうかということを自分でもかなり思ったことがあります。これだけの要求がもし通れば、もっと博物館としてよい情報を流すことができる、よい学芸員活動ができるのにと考えたのですが、実際に自分が今管理職になってみますと、なかなか難しいんだなということを今実感として思っています。

ですから、学芸員としてどうあるべきかということを一言でと言っても、こういう3段階構えで活動して来た私にはどれが一番理想的であるかということとはなかなか言えないんです。今、実質的には管理職の仕事になって、次の世代を担う学芸員にはこうなって欲しいなというような部分で、自分なりの考え方がありますので、それを今日はお話しさせていただき、また皆さんからご意見をいただければと思います。



---

まず、博物館の個性をどう構築するかということなのですが、一般的に博物館の個性というものはその博物館の展示面積や展示容積とか、要するに博物館とは何か物を見るところであるという意識が非常に強くなるので、展示してある物の内容で判断される場合が非常に多いと思います。ですから、新しくオープンした博物館だと、「あそこすごいね、今までにないね」と。他に無いというのは、展示側面のことで、ほかでは展示されていない新しいアイデアであるとか、莫大なお金をかけた、まねできないような仕掛けがあるとか、そういうものを個性として判断される場合が多い。これは、実質的には個性であるかもしれませんが、それは展示という一分野を通しての個性であって、本質的な博物館の個性とはまた違うのではないかと思います。

博物館の個性というのは一体何だろうか。例えば、横須賀市の博物館についてそれを振り返ってみますと、横須賀市の博物館にどういう学芸員が集まっていたのか、また集まってきたのか。博物館の学芸員というのは確かにオールマイティーである必要もあるんですけども、やはり専門性を持っているということも必要だろうと思います。その専門性があるからこそ、その学芸員の博物館の中での活動が外へ出た時に、初めて「あの博物館ではああいうことができる、こういう学芸員さんがいるからだ」ということで、それが博物館の個性を構成する一つの要因になると私は考えています。

展示されているものの価値観では、例えばこういうディスプレイをしてこういう展示をするときと見に来た人が喜ぶよとか楽しいよと言われてます。そういう表現方法も基本的には学芸員が考えて作り出しているものですから、あくまでも学芸員のアイデアであり、基本的な考え方の集大成が展示にあらわれるという意味では、展示も博物館の学芸員の個性のあらわれの一つだというふうに思っております。

同じ内容を楽しむためには、やはり自分で実感を得たほうがいいわけで、そういう意味では今確かにボランティアとかを博物館にどんどん導入していますが、日本のボランティア制度と海外で言ういわゆるボランティアというのは、ボランティアの意味が多少違うと私は理解しております。まだ横須賀市の博物館でボランティア制度を取り入れていないのは、その基本的な解釈が博物館内でまだ煮詰まっています。早く取り入れたらどうですかと言われてますが、まだ導入できないでいるという状況です。

つまり、博物館にボランティアとして来る方たちには、例えばもう少し物の本質であるとか実感というものをさぐってもらうために、より学芸員に近いレベルに近づいてもらう、そういう見方ができる、感じ方ができるということが必要ではないかと思っています。

学芸員が5人いれば、その五つの個性ある選択肢を、少なくとも一観覧者、利用者にはその選択肢があるわけで、その中の選択肢にたまたま合わない場合は、ほかの博物館でその選択肢に合う学芸員をお訪ねになるということでもいいのではないかと。例えば、ここに行ったらこういう教え方をしてくれたということ、何件も同じ選択肢内容で歩かれる、そういう利用者は

---

そんなに多くないのではないかなと考えています。

その中で地域との連携というものを考えていきますと、確かに現在は博物館離れしているだろうと思います。横須賀の博物館も全入場者数でみると横ばいから少し下がっているという状況があります。おかげさまで昨年は横須賀開国祭という行事がありましたので、勾配が一気に上がりました、もし開国祭がなければこちらのほうにはお客さんが来ないというのでは、やはり博物館に魅力がないということになるので、グラフの勾配を何とか下げないように努力しなければいけない。

それではなぜ博物館離れをしているかということですが、さまざまな情報がかなり氾濫して、インターネットでその情報が見られる。それからどこへ行っても2次的な資料が耳から目から幾らでも入ってくる。そういう中で、博物館でなければならぬ、博物館に行かなければ解からない、博物館で聞かなければわからないというような特性が必要でなくなってきたということですね。

博物館というのは、どちらかという百科事典的な存在で、どこのページから、どこから引いてもイントロダクション的にすぐ入れるという特性があります。しかし百科事典的な特性が今、インターネットに置きかわっていて、それも今、自分の机の上で、好きな時間に、好きなようにできるという時代ですので、そういう意味では博物館に求めるものと求め方が変わってきたということだろうと思います。

それはなぜかといいますと、展示更新が今はなかなかできない。これは先ほどの物理的な理由もある。展示更新ができなくなると、そこで利用者との間でコミュニケーションをとろうとしても、今の博物館ではちょっと無理だなと。アミューズ性で太刀打ちしようと思っても、それは実際的には無理だということになります。

だとすると、博物館の展示更新ができなくなっても生き残り作戦を考えた時に、今の博物館で得意とするものは何だろうか。これは個性のある学芸員がたくさんそろっていて、一人一人が講座をもつと非常にユニークな講座を開いてくれます。博物館の教育普及事業の中にさまざまな講座を取り込むようにして、それで参加者や受講者数をまず増やそうと。そういう環境である程度勉強をして、学芸員の考え方や物の見方が近くなってきた人たちに、例えば博物館で行う調査であるとか、研究であるとか、そういうものに協力するというような形で博物館を意識させる方法、それもひとつ横須賀市の博物館としての道ではないかと考えます。

先ほど柴田先生からも話がありましたが、これは昔から羽根田元館長が研究者であったということもあり、横須賀市の博物館はどうも調査研究型博物館というイメージがかなり強くあると言われます。もしそういうイメージがあるのであれば、それを博物館の個性として生かせないものだろうか。現在のスタッフでそれを完成させられないだろうかということも一応考えています。ですから調査研究、これは市民がすべきものではないというのがこれまでの感覚だっ

---

たのですが、学芸員というツールを活用すればもっと調査研究は楽しくなる、また楽しくさせるテクニックを学芸員は提供できるというふうに考えます。そういう意味ではまた地域との連携が可能であると。

学芸員の機能的な職能はという場合、私はもう既にオールマイティーである必要はなくなったのではないかなと。学芸員もかなり分業化しておりますし、それぞれ大学院や doktor コースを終了し、専門性を生かした研究としても非常にすぐれた業績が残せる人たちが多くなっております。しかし、その結論をダイレクトに博物館で表現しても一般利用者には通じないわけで、そういう意味では地域にいかに関わりやすく溶け込ませるかというテクニックを上手に伝えることも必要となります。

つまり、研究者というのはある意味ではスペシャリストなんですが、スペシャリストである前にいわゆるテクニシャンでありコーディネーターであることでは、学芸員にしかできない職能ではないかと思っております。

もう一つよく学芸員は一教育者であるべきだと言われますが、確かに教育者ではありますが、学校の先生が行っているような学校教育の立場での教育者と博物館の学芸員が行う教育というのは多少違うと思います。ですから、私も学芸員時代によく解説業務をしたのですが、その解説を学校の先生方式で行うと生徒がついてこない。その中に冗談を入れたり、おもしろさを取り入れたり、体験させたりすることによって、結構子供たちがついてきてくれるということを実体験していますので、観察会にしても、展示解説にしても、学校教育型ではやはりだめだと。どちらかといえば実体験が入る教育のほうがより興味をもってついてくれる。

ですから、横須賀市の博物館で昔から行っている自然観察会の導入の意味は、実は本物に触れるというような基本的な姿勢がありますから、そういう意味では博物館としての教育理念が生かされていると理解しています。

これは私ごとになりますけれども、先ほど瀧端さんの紹介でダイビングもやっているというお話がありました。実は最近、魚の研究というのが一研究者として純粋に分類学の研究だけではおさまらない時代になってきました。というのは、アマチュアダイバーの人がたくさん増えて、そういう方たちが水中に潜って写真を撮り、専門家はだしの良い写真を撮って、しかも我々が観たいと思っているようなすごい生態写真を次から次へダイビング雑誌に投稿するわけです。1,000円ぐらいの雑誌に一生かけても観られないようなすばらしいチャンスの写真もたくさん投稿されるわけで、そういう方たちとつき合っていると、そこそこの知識、つまりオールマイティー的な学芸員の知識ではとても太刀打ちができないですね。

これでは普通の学芸員の立場でダイバーとつき合っているだけではだめだなということで、自分が持っている魚の専門的な情報をそこに入れて、今、話したような個性的な知識を提供した時に、どんどん向こうからインターネットを通していろいろな照会が来たりするようになりました。

---

今は毎日メールをあけるのが楽しみで、逆にその情報を研究レベルでも利用できるという、非常に都合のよいシステム化ができてきているような気がします。

これをいち早く取り入れた例が、生命の星・地球博物館の動物部門で、画像データベースをつくりまして、日本国中のダイバーが生命の星・地球博物館にインターネットを通して、自分の撮った写真と魚の名前とを比較することができ、情報も得られると。これはある意味で博物館の学芸員と利用者との新しい結びつきというような感じがします。

こんな意味で、もうオールマイティの学芸員時代が終わり、少しずつ専門化した部分も必要になってきている。ただし、その専門家が研究者としての専門的な立場だけでは、一般の人たちが直接には受け入れにくいので、そこはコーディネーター、またはテクニシャンとしての学芸員の技量を発揮させるべきではないかと思っております。それが管理職の立場になりますと、自分自身がそういうことを率先してやりたいのですが、今はもうあまりできなくなってしまったので、むしろ学芸員にそういう方法での実践を今お願いしている立場になりました。

以上です。

瀧端 林先生、ありがとうございました。(拍手) 先ほどの柴田先生のときは拍手をいただくのを忘れてしまったのですが、最後にまた大きな拍手をいただきたいと思いますし、林先生のお話を伺いながらちょっとドキドキしてしまっていて、柴田先生がこの辺でもしかしたら角を出されるのではと思ったのですが、また柴田先生から反論がありましたらお話しいただきたいと思います。

今、短い時間で林先生から密度の濃いお話をいただきまして、例えば学芸員って格好いい、学芸員の心地よさ、そういうものにあこがれてこの道を目指されたことだとか、それから好きというのに定義はないんだという、これも非常に印象に残るお言葉でした。それから、仕事上のポジションがだんだん上がっていくにつれて、やらなければいけない仕事と、それから自分の専門を追究したい、そのジレンマで自問自答を繰り返された時期もあったというお話でしたし、また管理職になってみれば予算をとるための大変さということも知られたというお話でした。

物の本質をつかんで、学芸員に近いレベルで感じる、そういうことができる市民を育てること、あるいは自分のところの館でカバーできない場合は他の館へ行っていただくというようなお話もありましたし、それから横須賀の博物館は調査研究型の博物館として全国に知られている、あるいは国際的な活躍をしてこられて、それを個性として生かしていきたいとおっしゃられました。専門性を生かして、それをダイレクトではなくて市民にもわかるように、上手に実体験を踏まえて伝えていくこと、これが学芸員に求められる資質ではないかというお話でした。

今日午前中に大場信義主任学芸員に蛍の特別展の解説をしていただきまして、私、さきに大場先生が書かれた『ホタルの木』という本を読んでいたのですが、あれも手にとったところ、

---

一見絵本のようなパステルカラーも使った装丁で、中もとても美しい。内容は非常に専門的なことを書かれている。今日初めて大場先生にお目にかかったのですが、蛍のことを話しておられるととても生き生きしておられるんですね。ただ、その後で例えば蛍の図柄の浴衣を館からは予算がないので自分のポケットマネーで買いましたとか、それから蛍グッズを今たくさん展示しておられます。

さらに展示コーナーを進んでいくと、横須賀を中心として神奈川県下で蛍を保全していく、あるいは蛍がすむ環境を保全していくために、さまざまな小学校とか地域の市民団体が関わっておられる。そういう活動の紹介コーナーもつくっておられて、単にご専門の分野にとどまらず、でもそのご専門の分野も、映像を本当は大きく映し出せたらどんなに格好いいだろうとおっしゃられたように、生き生きとしておられるわけですね。だから、やはり展示解説を学芸員の先生にじかにしていただくことの醍醐味というのを、今日改めて発見したような思いがしております。

それでは、最後に平塚市博物館の浜口哲一先生からお願いいたします。

**浜口** 平塚から参りました浜口と申します。よろしくお願ひ致します。

お話が上手なお2人の後で大変やりにくいのですが、できる限りのことをお話ししたいと思います。

実は今日、私だけお手元に何の資料も用意をしていなくて、大変申し訳ないんですが、これにはちょっとしたわけがあります。この仕事をお引き受けした直後にある方からメールが来まして、おまえは学芸員失格だから早くやめろというふうに言われました。それで暴論だとは思いますが、100人に1人でもそういう意見の方がいらっしゃるといことは、やはり何か足りないところがあるのかなと思ひまして、ちょっと2～3日へこんでおりまして、この資料も作りそびれてしまったというわけです。

その辺のことも含めて、学芸員という立場で仕事をしている者がこんなことで困っているといひますか、いろいろ問題もあるよというようなことも含めて少しお話をさせていただきたいと思ひます。

さっきから私も横須賀市博物館育ちだということでご紹介をいただいたのですが、林先生の講演での、最初のスライドに古い久里浜の博物館が出てきまして、そこが私にとっても非常に懐かしい建物です。そこへ入りますと、歩くと床がぎしぎしときしむんですね。それで、中学生ぐらいの時ですから、踏んでいいものだからどうか非常におっかなびっくりで部屋の中へ入ったのをよく覚えております。それから、柴田先生だとか、あるいは植物の大谷先生だとか、いろいろお世話になって、だんだん博物館の仕事をしたいなと思うようになりました。ですから、私にとっては横須賀市博物館というのが自分の博物館体験というんでしょうか、その原点だなと思ひております。

---

それで、たまたま縁があってといいますか、柴田先生にいろいろお世話になったのですが、平塚で博物館をつくるという仕事を1973年からさせていただきました。そこへ入りましたら小島弘義さんという先輩の方がいまして、その小島さんがやはり横須賀市博物館の影響を大いに受けていた人物なんですね。小島さんは若くして亡くなってしまったものですから、大変残念だったのですが。それから、ほかのメンバーも含めて平塚にどんな博物館をつくろうかなというところで、随分いろいろな議論をして博物館をつくっていきました。その時にいつも横須賀の博物館がどうかということが、モデルといいますか、先輩として大いに参考にさせていただいたということを非常に強く思っております。今日その横須賀市博物館が50年ということで、本当によかったなということをおし上げておきたいと思えます。

学芸員の仕事をすることになりまして、あちこちの館へ行って他の学芸員の方とお話をする機会が増えてきました。その時に最初に感じたのは、博物館の学芸員というのは結構愚痴が多いなということだったんですね。さっき雑芸員ということ、柴田先生はどちらかという前向きニュアンスでお話しになりましたが、「雑芸員」という言葉は自己卑下的に使われる方が非常に多くいらっしゃるんです。予算がないとか、スタッフが足りないとか、大学に比べればどうのこうのとかという話をさんざん聞かされました。その時に自分なりに考えたことは、自分は愚痴を言わない学芸員になろうということでした。それが私にとっては学芸員という仕事についての第1目標でした。今日はお話の最初からちょっと愚痴っぽいことを言いましたので、30年たってそれを守れていないのかもしれないのですが。

その頃、先輩の学芸員からいろいろお話をいただいた中で、学芸員というのは研究もする、普及的なこともする、いろいろ質問にも答えなければいけない、とにかくいろいろなことが仕事にあるんだ、それをこなしていくのは大変なんだよというお話がよく出てきたんですね。そこで私が考えたのは、例えば何か観察会のような普及的な仕事をやる場合に、同じ地域で何回かやって、その都度リーフレットなんかをつくって、来ていただいた方にも何かデータというんでしょうか、少し調べていただいて、そういうものをまとめて本をつくるというふうな形をとっていったら、どうだろうか。そうすると、一つ一つの観察会は普及行事なんだけれども、同時に刊行物をつくる準備であったり、あるいは調査活動の一環であったりという、何かそういう有機的な結びつきというのをつくっていけば、より能率的というんでしょうか、仕事の整理というのがうまくできるのではないかなということでした。

平塚市博物館というのは、市民参加ということで多少名前が知られた存在になってきたと思うのですが、実は市民参加ということ、市民が活動に参加すべきであるという理念で考え始めたわけではないんですね。むしろ普及行事にいらしゃった方々と、さらに次のステップに発展していくようないろいろな仕掛けを工夫していったら、結果的にいろいろなところに市民の方が参加していただけるような場面づくりができたということになってきたなと思っております。

---

ですから、平塚の場合には理念ありきということで始まったのではなくて、実際的な活動の中で、では一緒に本もつくりましょうよ、今度は一緒にこういう調査もしましょうよ、みたいなことで、成り行きのままに発展させてきた結果が今のような姿ではないかなと思っています。

ですから、そういう意味では学芸員というのは理念を掲げるということも大事なんだけど、自分の目の前にいる市民の方たちの顔を見て、その人たちとどんなことがやっていけるのかなということを想像しながら、流れに任せていろいろ発展させていくこともすごく大事なことではないかなと思うんですね。それは恐らく柴田先生のお話で言えば、コーディネーター的な役割ということかもしれないのですが、そういうことを一つは強く思います。

いろいろ市民参加的なことを博物館でやり始めた時に、そういう活動のスタイルみたいなことを地域博物館という名前と呼んでいたわけですね。地域博物館という言葉にこだわっていたのは、さっき申しました小島弘義さんだったのですが、私はそれを聞いて、それだけではちょっとわかりにくいのではないかとということで、博物館を観光地型と中央型と地域型というふうに分けて整理したらということを考え、あちこちでお話をしたりしていました。そのことに注目をしてくださったのが、これもさっき柴田先生のお話に出てきましたが、伊藤寿朗さんでした。

伊藤さんが地域博物館を理論的に説明され、それからすっかり定着をしたんですけれども、その当時、私たち平塚のスタッフと伊藤さんというのは非常にいい関係だったなと今思えます。その時に私たちは、こう言うのは学会の方に失礼なんですけれども、博物館学というものにそれほど興味があるわけではなくて、どちらかといえば現場の仕事がおもしろくて一生懸命やっていただけでした。そこへ時々伊藤さんが来られて、おまえたちがやっていることというのは博物館学的に見るとこういうことなんだよというふうにおっしゃってくださったり、それから、あまり意識しないでやっているみたいだけれども、実は君たちがやっていることはこういう点で日本の博物館の中で先進的なことなんだよということを指摘してくださったりして、非常に勉強になりました。

そういう意味で、現場の学芸員と博物館学の研究者がいろいろなやりとりができるようないい関係が保てるとお互いに刺激できるのではないかと。それ以降そういう形でお付き合いできた博物館学の研究者というのはいないものですから、それはちょっと残念だなと思ったりしています。

それ以降も、市民参加的なことでいろいろ進めてきているのですが、その中ですごく大事ななと思うのは、学芸員集団のコンセンサスということなんですね。平塚の場合、6分野がありまして、各分野でいろいろな普及活動をやっているのですが、基本的な枠組みというのは自由参加の簡単に参加できる行事がある。それから、年間会員制の行事があって、その年間会員制の行事に分科会みたいな、さらに特定のテーマを持って活動している会があって、その特定



---

のテーマを持って活動している会の方たちが週のうち何回かは館に来てボランティア的な活動をされているという、大体そういうスタイルできているんですね。

そういうスタイルが各分野で定着していく中では、やはりそういうやり方でやっていこうではないかということについて、学芸員集団で基本的なコンセンサスがとれていたということが非常に大きい要因だったと思います。それがなぜとれたかというのもよくわからないところもあるのですが、初期の段階で小島さんを中心にいろいろな議論を随分長い時間をかけてした遺産というのが今でも生きているのかもしれませんが。学芸員というのは非常に個人的な仕事ではあるのですが、やはり博物館ということになると集団としての意思統一みたいなことが非常に大事なのではないかなと思ったりしています。

そんなことで20年、30年とやってきたのですが、最近少し変わってきたなと思うことが幾つもあります。一つは、博物館の活動に参加される市民の方々の意識の多様化ということがあると思います。例えば、広く参加者を募って市民参加調査を行ったとします。参加された方の中には、マニュアルを見ながらあちこちに調査に出かける、そのことがおもしろかったとおっしゃってくださる方も多勢いらっしゃるわけですね。まとめの会合に出て、それぞれの経験を発表し合って、そこで他の方と交流できて、それがよかったという方もいらっしゃる。それから、データの整理まで一緒にやって、みんなの名前が出ているレポートが発表されて、そこで達成感があったという方もいらっしゃるんですね。ところがそれだけではなくて、市民参加調査というのは、それを企画する段階から市民が加わるべきではないかとおっしゃる方も最近結構出てきたんですね。それも市民が企画段階から加わった方がいいのではないかという方もいる一方で、市民が計画段階から加わらないとだめだとおっしゃる方だとか、計画段階から加わらないと意味がないとおっしゃる方も出てくるわけですね。そういうふうに参加される方の求めていることが非常に多様化してきている、そこをどうさばけばいいのかというあたりが現場の学芸員としては結構悩みに思っているところです。

なぜ悩みかといいますと、そういう企画段階から参加すべきだとおっしゃる方の意見を取り入れてやっていると、他の人が引いてしまうということがあるんですね。非常に意識が高い方の方向で進もうと思うと、多勢の人が離れていってしまうというジレンマがあります。そのあたりをどういうふうに対応していくべきかということが、実は今、私の中では非常に悩んでいる部分で、そういうことで何かいいお知恵があればお聞きしたいなとも思っています。

ある時に植物のコケの勉強をしたいという方が現れたことがありました。私はコケは全然わからないので、うちの館ではちょっと無理ですよというふうにお答えもできないことはなかったのですが、少し専門の方をお願いをして、博物館を舞台にコケの勉強をするみたいな形のやり方もとってみようかなとちょっと考えまして、コケの学習会をやったんです。他所から講師

---

の方をお願いして、3回ほどやりまして、それに出た方たちが自主的な勉強会をやりたいということで、湘南コケの会という会をつくったんです。それで今、月に1度ずっと活動をしているのですが、それを知った方から、いつの間にかそういう会ができて博物館で活動をしているというのには、疑問があるという意見も頂きました。

そういうふうには市民の方の意向を聞いてそれを支援するというふうな立場でやり始めたことも、常にその情報をオープンにして、いろいろな人の参加のできる機会をつくっていかないと、批判が出てくる。そういう時代という言い方はよくないかもしれないのですが、そういうことでも少し悩みを抱えたりしております。

最後に、もう一つ、平塚市博物館の最近5年間での大きな変化というのは、市役所の行政の中での博物館の位置というのが割としっかりしてきたかなという点です。今、私たち学芸員がいろいろな会議に出席したりしておつき合いをしている市役所の課の方というのは10以上ありまして、市でやっているいろいろな仕事の中に博物館の意見を聞いていただける場面というのが増えてきています。

先ほど、評価というお話が出ていたわけですが、シートの上でいろいろな評価をしていくということがこれから必要になってくるだろうと思うのですが、どんな形で評価をするにせよ、その前提になる空気みたいながあると思うんです。市役所全体として博物館というものはなかなかよくやっているよとか、割と役に立っているじゃんというふうに見てくださるのか、あるいは議員さんがそういうふうに見てくださるかどうかというのが非常に大事なところではないかと思うんですね。その空気をつくるという上で、学芸員というのはもっともっと気を使って動かなくてはいけないことが多々あるのではないかなと思っています。

今、平塚の館長は歴史担当の学芸員なのですが、その館長は市役所の中に非常に広い人脈を持っています。我々はそれは人柄のせいと思っていたのですが、実は館長が非常な努力をしていたということを最近知りました。市の職員が異動すると一覧表なんか来るわけですが、それを全部チェックして、誰がどこに行ったかということを入れた、市役所に行ったら挨拶をするということをずっと繰り返してやってきて、その中で市役所のいろいろな人たちのつながりができてきたよということを最近聞かされました。そういうことは博物館学的な話ではないかもしれませんが、市の中、あるいは地域社会の中で博物館というものの存在意義がみんなに認められていく上では非常に大事なことなのではないかなと思ったりしています。

まことに雑駁な話で恐縮ですが、ちょっと愚痴が多くなりましたけれどもお許しください。どうもありがとうございました。(拍手)

瀧端 浜口先生、どうもありがとうございました。浜口先生はいろいろなお話をしてくださいます、例えば市民参加というのも理念から始まったのではなくて、どういうふうに行っていけばいろいろな仕事がうまくいくかと考えながらつくり上げてこられたということをお聞かせ

---

ていますし、コーディネーター的な役割が必要だというのは、これは柴田先生のいろいろなお考えや活動を引き継がれていることかと思えます。

それから、学会的に考えますと、実は博物館の研究者と博物館のつながり方がかつての伊藤寿朗先生と平塚市博物館の関係のように今できていないで、つき合いのできる研究者がいなくなっているのではないかという、ちょっと耳の痛いご発言をいただきました。

それから、参加される市民の方の意識が変わってこられたということで、積極的な企画段階から加わりたいという、ある意味強い市民の方の要望意見を入れていると、大勢の気軽に参加しようという、ある意味お膳立てに乗ろうと思っておられるような市民の方が引いてしまうという、そのジレンマを今考えておられるということでした。

最後、行政の中での博物館の位置づけ、これも林先生とのお話ともつながりますが、浜口先生もより管理的な立場に近づかれて、現在の館長さんのお話から、実は役所の中でかなり頑張ってお人脈をつくってきたと。この人脈というのもやはり柴田先生がおっしゃられた Human relations にかかわってくるのだと思えます。

あと残りわずかの時間ですが、15分ほどありますので、3人のパネラーの先生方、それぞれお話しされて、他のご発言に対してもいろいろご意見もおありかと思えますし、アドバイスもおありかと思えますので、柴田先生から少しお願いできますでしょうか。

**柴田** 浜口先生は非常にユニークな活動をしておられるというのを、私はいつも感嘆しながら見ているのです。

例えば、セミの抜け殻を子供たちに集めさせるのです。まず集めたセミの種類を学問的にきちんと分類します。いいかげんにしない。大体市役所には2500分の1とか3000分の1とかという地図がある。その地図の上にプロットするんですね。どの地域にはどういうセミがたくさん出るかというようなことがわかってくる。

同じように、ハチの巣を集めると、どこにどんなハチの巣があるかというのがわかってくる。その中から、例えばキイロスズメバチってこんな丸い巣をつくるスズメバチがいるんですが、あれが町の中にどんどん巣をつくっている。何でキイロスズメバチが町の中へ入ってくるんだろうって、その辺のところから浜口先生の真骨頂が出てくる。

キイロスズメバチの天敵はオオスズメバチなんです。オオスズメバチというのは、木のうろだとか羽目板の裏方などに巣をつくるスズメバチなのですが、木のうろのようなもの、それから羽目板でつくったような家がなくなってきまして、オオスズメバチがだんだん少なくなってくる。そうするとキイロスズメバチの天下になるのですが、キイロスズメバチは缶ジュースの缶が捨てられると、あそこから出てくる人工香料のにおいをかいでやってきて、町の中へどんどん進出していく。そして町の軒の軒下や何かに丸い大きな巣をつくる。そういうような物の見方を詰めていくと、今の都市化の問題というのがスズメバチなりセミの抜け殻なりを通して

---

的確に浮き彫りにされてくるんですね。

土曜日の午後に平塚の海岸で打ち上げの漂着物というのを拾って、それを分類して、何を考えるか。そういうようなことを、浜口先生はこうしなさい、あしなさいと言わない。「こんなのやったらいいと思うんだけどな」というような呼びかけをやっていくと。浜口先生はCoordinatorってしきりにおっしゃっていたのですが、今はやりの非常にすぐれたFacilitatorの権化みたいなのが浜口先生ではないかなと思います。

そして、いつもご自分の名前は上に出さない。縁の下に潜って、くすぐるというか、上手に活性化している。したがって、今の最後のお話では市民からいろいろな要望が出てきて、その中には愚痴みたいなのもある。いろいろな価値観がありますので、浜口方式がいいという人もいるし悪いという人もいると思うんですけども、そういうことを博物館にぶつけてくること自体が、市民が自分たちの市の博物館に対する意識が高まってきている。横須賀の博物館はどうですか。——結構あるそうですね。

林 よろしいですか。

瀧端 はい、お願いします。

林 私、今、浜口さんのお話を聞いていて、やはりよくわかるところがいっぱいあります。

それで特に重要だなと思ったところが一つ、恐らく今日会場にいらっしゃる方たちは、当然博物館の現場で仕事をされている方もたくさんおられますし、博物館学を専門とされている先生方もいらっしゃると思うんですが、先ほど浜口さんは平塚市の博物館の中で最初にいろいろやってきた中で、集団の中でコンセンサスをとることが非常に重要なんだなということをおっしゃっていました。これは、例えば横須賀市の博物館を例にとりますと、先ほど話したように、博物館に今いる学芸員の技量と個性をより強く前に出してアピールしようとするほど、個々の学芸員のアピール量がやはり高くなります。そうすると、横須賀市の博物館の学芸員としてというコンセンサスをとることが、なかなか難しくなる場所も多々出てきます。

そういう意味では、やはり理想としているラインと集団の中でのコンセンサスというのは非常に難しくなる。つまり、博物館の学芸員として全員で何かやらなければいけない時に、同時にそういう態勢なり考え方がすぐ前向きになるかというのは幾つか自分でも感じる場所がありました。そういう意味では、個々の個性も必要なんだけど、やはり集団の中でのコンセンサスというのが大変重要な姿勢ではないかなと感じました。

それから、横須賀市の博物館にも大変刺激的な新聞投書をされる方もおられますし、それから直接私の耳に入ってくるものもありますし、電話で、または横須賀市役所に対しても苦言を出せる部分がありますので、そういうものも幾つかあります。その全部に答えるというのはなかなか難しいんですが、できるだけ違和感のないような解決法はとっております。

今日一番最後のプレゼンでご紹介しましたが、つい最近、馬堀教育園のすぐそばに家を建て

ている方たちから、雨樋にドングリ（マテバシイ）の木から種が落ちてそこから芽が出ていると。泥が底にかぶさっているからそうなる。落ち葉もいっぱいかぶさっている。何とかそれを博物館で掃除していただきたいというような感じですね。

確かに境界領域は非常に難しいところなんです、ドングリの芽が出てしまうぐらい放っていたのかという意見もありましたし、自分の家の樋だったら自分でもできるのでは、でも博物館のドングリの木が原因であるのなら、やはり博物館がしなければいけないのではないかと。ように、館の中でもいろいろな意見がありました。無事予算を使って処理できて、先方さんからは大変喜ばれましたが、非常に難しい側面もあるんですね。

特に今日の話の場合、平塚の浜口さんのところもそうですし、私のところもそうですが、公立（市）の博物館であると、博物館である以前に市役所でしょうというような考え方がありますので、そのハードルをどう乗り越えるかという部分がありまして、なかなか厳しいことも事実です。

瀧端 ありがとうございます。柴田先生からは、市民の要望が直接ぶつけられることこそが博物館が開かれているしるしだ、という力強いなぐさめというのか励ましの言葉をいただきまして、この横須賀市博の方もなかなか厳しい状況にさらされているけれども、それは柴田先生流に解釈すれば、やはりまだ言っても聞いてくれるし、受け入れてくれるし、変わってくれるかなという期待のもとに、いい関係ができ上がっているのではないかと思います。

林先生が館全体、集団としての学芸員間のコンセンサスがなかなか難しいということをおっしゃったんですが、ではなぜ平塚市博物館ではコンセンサスがうまくできたのかを浜口先生に、少しお話しただけならと思います。

浜口 そうですね、そこは実を言うとよくわからないんですね。さっきもお話ししましたように、平塚の館は今、館長も含めて8人の学芸員で仕事をしているのですが、そのうち4人は準備室の時から一緒にやっているんですね。ですから、博物館をつくる時に、さっき言いました小島さんを中心にどんな館をつくろうかということに相当いろいろ議論をしたということが今も生きているかなと思っています。

最近は全体的な理念についてそんなに時間をかけて話すということはないんですけども、新しいことをやる時にどんなふうにしてやっていくかということの議論は、全体で割とよくするんですね。

例えば、5年ほど前に展示解説ボランティアについての受け入れといいますか、どういう形でやろうかという議論をしました。その時に制度とか仕組みとして展示解説ボランティアの育成をしようではないかという意見が一つはあったんですね。しかし、それでいいのかなというもやもやしたものがありまして、相当長いこと話したんですね。それで、結論的にできたのは、展示解説をやりたい人の集まりをつくろうということでした。つまり、展示解説をやりた

---

いと言ってくださる方に集まっていたいただいて、どんな解説をしたらいいかということも話し合ってもらおうと。必要な情報提供はもちろん我々ですが、運営としては自主的な形でやってもらおうというのがいいのではないかということになりました。その落としどころが見つかった時に、うちの館でみんなのコンセンサスが割ととれているんだなということ、最近の例としては実感したんですね。ですから、いろいろなことを突き詰めて話すということがすごく大事なのではないかなと思っています。

それから、ついでのことなんですが、さっきまでちょっと後ろ向きの話も幾つかしてしまったのですが、学芸員の仕事、市民の方の意識の多様化ということもあるし、それから行政の中でいろいろなレベルで求められていることもあるということ、結構今まで以上に雑芸員的な部分というのは膨らんでいると思うんですよ。それで、私の心配というか予測というのは、学芸員というのはこのままいくと二極化してくるかなという気がちょっとするんですね。市民の方たちとのつき合いとか、あるいは行政の中でいろいろなやりとりとかが結構おもしろくて、そこにはいろいろな可能性もありますから、そこに自分のアイデンティティーを見出していくということで活動をする学芸員もこれからどんどん出てくるだろうと思うんですね。一方でそういうのは煩わしいということで、今まで以上に自分の狭い専門の中に閉じこもっていく学芸員というのも逆に出てくるのではないかなという、そんな不安とも予測ともつかないようなことをちょっと考えたりしております。

市民の方たちとのつながりとか、あるいは行政の中でつながりということの中で、博物館活動というのを一生懸命やっという学芸員にとって、そのよりどころになる場所というのがやはり必要なのではないかなと思います。よりどころになる場所というのは、我々にとって伊藤さんがそうであったように、自分がやっていることが日本の博物館の世界の中ではどういう位置づけなんだらうかとか、あるいは学問的にどうなんだらうかという、その座標を与えてくれるような存在ということなんですね。

博物館学会というものがこれからどういう方向に進んでいくのかわかりませんが、そういう時に何か学芸員のよりどころになれるということの一つの目標に掲げていただくと、すごくうれしいと思います。多分市民や行政とのつながりを重視するスタンスで仕事をする学芸員は、個人名の論文とかというものはあまり書かないだろうと思うんですね。そうではなくて、例えばグループの名前での報告とか、あるいは市民の方も合わさっての発表とか、そういうような形式でいろいろな経験を出していきたいだろうと思うので、そういう形を受けとめてくれるような学会であって欲しいなということを一いつ思っております。

以上です。ちょっと長くなりました。

瀧端 浜口先生、ありがとうございます。館の中でさまざまな議論を徹底的にやっという、そのもやもやをすっきりさせるということをアドバイスいただきましたし、それから最

---

後はこの会の締めくくりにあつさわしく、博物館学会が、あるいは博物館の研究者がどのような方向に進んでいったらいいのかということで、力強いというか、叱咤激励をいただいたように思います。

もう時間なんですけど、もうしばらくよろしいですか。今、浜口先生から学会なり博物館学の研究者に対してのご要望がありましたので、この機会ですので、柴田先生と林先生から一言ずつ博物館の研究者は、これは個別専門の、例えば魚とかという領域ではなくて、博物館のことを研究する研究者として、あるいは博物館学会がどうあったらいいか、ご意見を一言ずつ聞かせていただけたらと思います。

**柴田** 先ほど私が申し上げたように、学芸員は未来志向ができなければいかんということ。それから、文明論的に今の文明がこのままですと滅びに至る文明だということ。それをどう修正していったらいいか。あと1世紀以内で、下手すれば大変なカタストロフィーが起こる。そのことを学芸員が的確に指摘をして、それへの対応を考えて。それは第一部で博物館のいろいろな検討の問題がありましたね。どういう視点でお上が検討するのかわからないけれども、検討項目の中にそういうことを加えるってすごく大事なことではないかなと思います。

学会に期待します。

**瀧端** ありがとうございます。

**林** 前に大学で博物館学の講義をしていたことがあるんです。その時は博物館学の専門家でも何でもないので、今までやってきた自分の経験を1から10まで全部授業で披露しました。それが私の博物館学であり、博物館で働いている人間が博物館の良いところと悪いところをしゃべるんだから、これが一番正しい博物館学だから、そこを受けとめて欲しいというような内容の話をしました。

それで、ご存じのようにいろいろな博物館には博物館実習という形で、将来に夢を求めて学芸員を目指される方がたくさんいます。私どもの博物館でも実習等を受け入れていますけど、恐らく博物館に勤められればそのギャップというものがよくおわかりになるだろうと思います。

例えば、学会の中では博物館学、いわゆるミュージオロジーというものをどのように評価していったらよいかということや、実質的な教育の中で未来の学芸員にその内容を伝えるという部分について、そういう仕事に携わる先生たちがどういう考えをお持ちになっているのかでしょうか。例えば自分のミュージオロジーを持っていて、それを生徒に本当に持論ではあるけれどもミュージオロジーの本質であるということをお話されているのか、また学会の中ではそういう論議があるのかどうか。もしないとしたら、ぜひそういうトライもしていただけたらいいような場を作って、私たちにそういう場を公開していただけたらありがたいなと思います。

**瀧端** ありがとうございます。大変ある意味厳しいご意見をいただいたと思うのですが、学会全体の意向というのは私が答えることではないと思いますので、これからそれぞれ研鑽を



---

積み、それから今日こうして館でこういう会を持たせていただきまして、これから博物館学の研究者の側と、それから博物館の中でさまざまな分野を研究されたり、あるいは管理運営で苦労をされている皆さん方と一緒に議論ができる。学会自体はいつも開かれているのですが、なかなか現場の学芸員さん、あるいは事務系の職員さんなどに来ていただけないということもありますので、いつも開かれているつもりなんです、なかなかお忙しくて来ていただけないという状況もあって、お互いにいろいろな議論が、本気でミュージオロジーというものを議論できる場というのをつくっていただけたらと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

林 宣伝だけ一つさせていただいていいですか。すみません、この場をお借りしまして。

実は読売新聞にちょっと記事で載せていただいたんですが、つい先日変わった標本を横須賀市の博物館で入手したというか、提供していただける機会がありまして、それが新聞に載ってからかなりセンセーショナルな話題をまいておりまして、せっかく今日いろいろなところから博物館にいられているということがあるので、実は今日だけ展示室に飾ってあります。学会で発表した内容も一緒に展示しておりますので、ぜひこの機会に、帰りがけに皆さんお出になる玄関口のナウマンゾウの展示模型の隣にショーケースがありますので、ぜひ見てから帰っていただければと思います。

宣伝で申しわけありません。内容は見てからのお楽しみです。(拍手)

---

# 我ら学芸員 ～ 楽しくて、生き甲斐のある素敵な職能 ～

柴田 敏隆

1. 三日やったらやめられない博物館雑芸員！？  
猛烈な盲点（欠陥）は土日が無いので、家庭生活は苛酷！
2. 学芸員に求められる資質
  - 2.1 Toughness 頑健 蒐集の Professional、情報処理の Expert。
  - 2.2 Kindness 親切 優しく親切丁寧、奉仕、人脈 Human relations を豊かに。
  - 2.3 旺盛な野次馬根性 学際 Interdisciplinary を積極的に消化。
3. 学芸員に求められる能力
  - 3.1 Facilitator 面倒見、世話焼き、下から支え活性化する「地の塩」。
  - 3.2 Coordinator 整合調整。
  - 3.3 Director 演出、指揮。
4. 学芸員の使命
  - 4.1 実物（博物館資料）で歴史を綴る。
  - 4.2 それに基づく的確な未来予測とそれへの指向（志向）。
5. これからの博物館は
  - 5.1 自然史（誌）博物館ならば付属の自然園を持つ。その土地に Endemic な自然（生態系）を保全、復元する。
  - 5.2 人文博物館ならば分館（園）として歴史的風土の現地保存をし、復元する。
  - 5.3 Ecomuseum ならば、そのエリアの生態・文化複合を明らかにする。

【閉会の辞】

西 源二郎\*

Genjiro NISHI

西でございます。全日本博物館学会で総務委員をやっております。シンポジウム第二部で、諸先生方の素晴らしいお話をお聞きしていると、世の中には「生きた何々」という表現がありますが、まさに「生きた博物館学」というものを目の前に見せていただいた、と実感いたしました。それを言おうと思っていましたら、それに重ねて最後に林先生が、「ぜひ見ていって欲しい資料がある」と言われました。ああ、この積極性も学芸員に必要なのだと思ったら、その資料が何であるかはあえておっしゃらない、この教育的な心がけ、これこそがまさに博物館学だと感じ入ったしだいです。

今日は、50年の歴史を歩んできた先駆的な博物館の真骨頂を聞かせていただきました。それに比べて歴史が30年の学会は、まだまだ若うございます。今日の講師からいただいた宿題を、今後どれだけやっていけるか、これから学会員一同がいろいろ努力をして進めていきたいと思っております。ここにお集まりの皆様も全日本博物館学会にもぜひお入りになりまして、一緒に博物館学をきわめていただければ大変有難く存じます。

本日は、どうもありがとうございました。（拍手）

（終了）

---

\* 東海大学海洋科学博物館館長